英語科教育学Ⅷ（月４）2014 年 4 月 21 日
発表者：Y.T.

Introduction: An Overview of Teaching Second Language Conversation(p.1-p.8)

■筆者のエクアドルにおける教授経験について

- 20 年以上もの間，EFL 教授者であり，academic director でもあった。
- さまざまな生徒を教えた。

（１）年齢：中学生から大人，専門職者まで
（２）英語のレベル：初級者から TOEFL 対策クラスまで
（３）クラスの規模：1 人から 40 人まで

- 忘れられないのは，ある学校の男子生徒クラス。（11 グレード，39 人）
  しつけの問題で前任者が辞めた。

問題点は生徒たちの英語への関心のレベルが異なり，ごく少数の生徒しかクラスのディスカッションで用いられていた面白味のない話題に関心を持っていないということ。

（１）会話可能な”Interest Inventory”を与え，生徒にいくつか話題を追加させた。
→生徒が無関心で退屈すぎると感じていた話題やシラバスは全く使わなかった。
（２）生徒の関心のある話題について調査・発表をするよう課題を出す。
発表者以外の生徒は，発表を聞き，メモを取り，質問を練り，口頭発表を評価する。
→発表者以外の生徒も巻き込むことができ，集中させられた。
→生徒の不作法やほかのしつけの問題も少なくなった。

■筆者のアドバイス

- ペアワークやグループワークが有効。
- グルーピングには限界がある。　〇2 人から 3 人　×5 人のグループ
- 生徒を実生活で使うような会話活動に参加させる活動の種類は，生徒の英語レベルによるところが大きい。教師や生徒の性格や目的によって活動を選ぶ必要がある。
- ある年齢のグループで上手くいった会話の話題や活動が，他のグループでも必ずしも上手く働かないことを気に留めることが必要。
  大人の生徒がよく取り組んでいた多くの活動も，11 グレードの生徒では使えないものだった。

■学習者の視点からの会話クラス

- 「第二言語能力」と聞いて第一に思い浮かべるのは，Speaking。
- Speaking や会話を教える際に知っておくべきは「なぜその学習者は英語を話したいか」。
- 学習者のニーズに対する答えを探る中で何に焦点を当て何を教えるべきかよりわかる。

（例）言葉探しのために話者がよく止まる→fluency
コミュニケーションを妨げるような目立ったアクセント→pronounciation

Discussion Points

1 What are Japanese students' needs for speaking English at JHS or HS?
2 How do you motivate Japanese students at public junior high school to speak English?

■英会話の授業にどの名前を使うか。
会話：流暢さ，文法，リスニング力
→会話を扱う授業の授業名は様々。（speaking, discussion, oral communication）

■教師の視点からの会話クラス
- 指導力のある教師となるにはできるだけスピーキング教授に精通していることが必要。
- よい職に就くためにも，スピーキング教授力は必要。
  求人では主な条件として「会話を教える力」をあげていることが多い。
- この本に書かれていること：学習者のニーズ理解の手助け
  学習者のニーズに役立つ具体的な classroom activity

■この本の構成
Chapter 1　よい会話クラスの５つの要因
（学習者，カリキュラム，話題，2 つの言語，タスク）
Chapter 2　会話や話すことの様々な側面における調査
- 6 つの Key terms
  (流暢さ，正確さ，中間言語，理解可能なインプット，意味交渉，強制的アウトプット)
- 一般的な話題から特定のスピーキングタスクにどう移るか
- 効果的なタスクを設計する 3 つの重要な要因
  （情報量，構成要素のプランニング，タスクへの解決策）

Chapter 3　20 人の教師による異なる国々で会話を教えたことについての経験談
Chapter 4　20 のアクティビティーについての詳細説明
（筆者自身が ESL/EFL の会話クラスで実際に使い効果的だったもの）
Chapter 5　効果的でなかった 10 のアクティビティー
付録

【考察】

はじめに

私は公立中学校の英語教師として Long Term Goal（大人になった時に英語を話せることがいかに大切か）を生徒に理解してもらうこと・感じてもらうことが難しいと感じてきた。日本では日常生活の中で英語を使う機会が少ない。そのような環境な中で生徒は「英語を話せなくても困らないもん」「なんで英語を話せるようにならないといけないの？」などと感じることもあり，実際にそのように言われたこともある。そこで以下の 2 つのディスカッションポイントを設定した。

１．日本の中高生のスピーキングに対するニーズは何か

ディスカッションでは，Short Term Goal（短期的な目標）ととらえられるようなニーズが意見として出てきた。中高生で共通するニーズとして考えられたのは，英検の 2 次試験（スピーキング試験）に合格するため，留学のため，ALT や外国人と話したいから，純粋に英語が好きだからなどというニーズである。高校生のニーズとしては，TOEFL 対策，授業での英語でのディベートで発言したいからなどがある。大学入試に TOEFL が導入されるという動きがあるため，中高生自身が「英語を話せるようになりたい」というニーズは今後より一層高まっていくのではないかと考える。

ここまで Short Term Goal について述べてきたが，やはり教師は Long Term Goal も生徒に示していく必要がある。大人になった時，英語を話せることがいかに重要かということである。グローバル時代の今日，仕事で英語を使うことはよくある。世界において問題が山積みの中，日本人は地球人として，英語を使い，世界中の人々と話し合いながら改善に向けて努力していく責任があると考える。また「海外旅行に行った時に，英語が話せると便利だよ。」などと伝えることができる。

このような長期的な目標も生徒に提示しつつ，生徒の発達段階や英語の熟達度に応じて，生徒が持っている短期的な目標やニーズを教師はとらえて授業を工夫すべきである。

２．どのようにして日本の公立中学校で英語を話すことに対して生徒を動機付けるか

生徒を動機づけるには，教師の努力によるところがかなり大きい。授業の雰囲気づくり（安心して話せるいい雰囲気），英語を話しやすくする授業形態の工夫（ペアワークやグループワーク），英語の重要性や教師自身の経験を伝えることなどである。

また，「英語なんて一生使わないよ」などという生徒には，その言葉の深層にある学習者の心理をとらえることが必要である（田尻，2009）。英語に対してネガティブな発言をする彼らの心理は，「英語がわからなくて辛い」，「授業が面白くない」，「先生が嫌い」，などといったものであるかもしれない。その心理をとらえ，発達段階に合わせて授業の中で扱うアクティビティや，会話教材の中に取り入れる題材，授業形態などを工夫していくべきである。また私が重要だと考えるのは日ごろから彼らとコミュニケーションをとることを大

切にして，相互理解を深めることである。その中で，授業をどう工夫すればよいのかについて発想が得られると考える。

まとめと課題

　このディスカッションを通して，日本の中高生の英会話に対するニーズや，彼らをいかに動機付けるかついて理解を深めた。特に，英会話に対して消極的な生徒とどのように関わり，授業を工夫していくのか，今後も考えていきたい。

参考文献

田尻悟郎『（英語）授業　改革論』教育出版，2009 年，115－116 頁

5 ページに続く

2014/04/21
英語科教育学Ⅷ
報告者：Y.H.

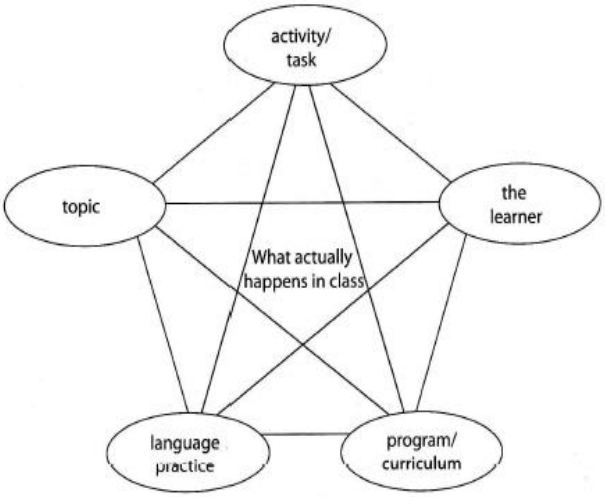
担当部分 P.9~P.14

１．Five Fundamental Factors in Planning and Teaching a Conversation Class

【教師が考慮すべき５つの要素】

■アメリカやブラジル、韓国などにおける会話の授業では、授業時間中の大部分が教師ではなく生徒が話している。何をどれくらい、どんな目的で話すかというのはクラスによって異なるが、教師が会話の授業を計画する際に考慮すべき５つの重要な点がある。

① 学習者（年齢、レベル、到達目標など）
② プログラムや学校（教師はカリキュラムに従うため）
③ 問題とするトピック
④ 二つの言語（a.タスク内における言語　b.タスクのための言語）
⑤ 会話するのに役立つアクティビティやタスク



P.10 FIGURE 1 より

【歴史的背景】

■1950 年代と 60 年代にはオーディオリンガリズムという聞き方と話し方の訓練に焦点を当てた方法が主流なものであった。このオーディオリンガルメソッドにおいては内容や学習者、トピックなどではなくアクティビティやタスクが最も重要とされていた。

■1950 年代から 80 年代の半ばまでの ESL/EFL 教育のメインは第一に文法であった。この時代には、文法事項をマスターすることで優れた英語話者が育つのではないかと考えられており、この考えは今なお EFL 教育の現場に根強く残っている。

⇒10 年間も英語を勉強してもなお自ら英語を話すことが出来ないという問題の要因。たしかに文法学習は重要であるが、文法だけというように一つの側面に焦点を当てるのでは問題の解決にはならない。

■1950 年代から 80 年代半ばまでの文法第一という考えに対して、1985 年の Krashen の論文によってパラダイムシフトが起こった。文法を学ぶこととその言語を知ることを同等とみなすそれまでの考えに対して、Krashen は実際に生じる言語を習得するのに必要な唯一の要素が comprehensive input であると提唱した。しかし言語教育におけるこの激的な変化は、学習者の結果や成果には大きな変化はもたらさなかった。現在この仮説が提唱されてから 20 年を経ているが、未だに言語学習における成果は得られていない。
→たしかに教師によるインプットは重要だが、Krashen のインプット仮説の実証可能な証拠はない。
※インプット仮説とは学習者の現在のレベルを‘i’とし、今より少し高いレベルである‘i+1’を理解できたときに学習者の能力が進歩するというもの

Factor 1: The Learner, Especially the Learner's Age, Proficiency Level, and Goals
【学習者について】
■ESL のクラスにおいてスピーキングに影響を与えるのは学習者の出身国→日本人はメキシコ人より無口であるなどの特徴
■出身国によるカテゴリーの中でも、個人によって差異があり、日本人でもおしゃべりな人、メキシコ人の中でもより多く語彙を知っている人など様々である

■教師が認識しておくべきカテゴリー
→会話の授業はリーディングなど他の授業と違い、小規模で教師と学習者の関係も近い
⇒教師は学習者の年齢や興味、動機、文化的背景などを知っておくことが重要

In the Real World
■ある教師が、学習者の英語が自分の子供と同じレベルであることから、子供がするようなアクティビティを行っていた
■大人の学習者は子供ではない
⇒大人を教える際に最も生じやすい誤りが学習者を子どもと見なしてしまうことである。大人学習者の英語がネイティブの子どもの英語と似ているというのは大きな誤解である。教師が認識しておくべき重要なこととして以下二つが挙げられている。
①子どもは子ども、大人は大人である
②多様な国籍の学習者がいるということ→どのグループでもアジア人は質問に答えたがらないが、スペイン人などは自発的に答えるなどの特徴

②⇒例１．日本人や韓国人はリスニングが身に付くのに多くの時間がかかる→日本や韓国の教育においては言語を習得することは文法や語彙を覚えることだと思われているため

例２．日本では静かに授業を受ける文化→積極参加の授業形式は異文化である

Discussion and Practical Application for Your Teaching

■５つのファクターの中で学習者は最も重要なファクターである

←学習者なしでは授業は成り立たないので、教師はすべての生徒の特徴を把握するべき

■ESL/EFL 学習者の重要な特徴

1. 年齢
2. 英語を話したい理由
3. 熟達レベル
4. 英語学習への態度
5. 学習時間の制限
6. 教育的な背景
7. 性別
8. 意欲の度合い
9. 学習技術・習慣
10. 性格（内向的か外交的か）
11. 話すことに伴うリスクを負う意志
12. 分野依存、分野独立
13. 母語－英語間の差異の対照研究
14. 学習スタイルの違い
15. 実践練習の機会

■会話の授業に影響する上記のような特徴を認識しておくということが重要

←これら全て、あるいは大部分が実際の教育現場に関連しているわけではないが、これらのうちのいくつかは学習者一人一人を「個」としているものであり、それは教師が効果的な会話の授業を形成する能力に強い影響を与えている。

◎ Discussion Points

１．本文では一般的にアジア人学習者は質問に答えたがらず、スペイン人学習者は積極的に答えるなどの特徴が挙げられているが、学習者の上位フィルターを下げるにはどうすればよいか

2．実際のクラスにおいて多様な「個」が存在する中で、教師はどのようなことを意識しながら授業を行うべきか

【考察】

1950 年代から 80 年代の文法第一という考え方は確かに現在も続いており、私たちが実際に中学・高校で受けた授業はそのようなものであった。おそらく一般的な中学生、高校生には、文法や単語は分かるが実際の会話では話すことが出来ないという人が多いと思われる。その一方で、私の経験だが中東などの諸外国から来る学生は、文法や単語はあまり知らないがとにかく会話の能力に長けていると感じた。知らない単語に出会ってもとにかく話せるので、その意味を聞くことができ、その方が英語の能力はこれから伸びるだろうと考えられる。日本でもそのような国のスピーキング指導を見習うべきだと感じた。

授業で扱ったディスカッションポイントの二つ目、「実際のクラスにおいて多様な「個」が存在する中で、教師はどのようなことを意識しながら授業を行うべきか」では、以下のことが多くのグループで挙げられていた。

・ 教師は一人一人の母語、文化、それまでの経験などを尊重すべきである
・ 個人の長所を生かす指導をする
・ 教師は生徒との信頼関係を築くために交換日記などを行う

【まとめ】

教師は学習者の年齢や興味、動機、文化などの背景の特徴を把握することが重要である。また、大人学習者の英語のレベルが子どもと同じくらいであるという理由で子どもが好むようなアクティビティを行っていたという例が挙げられていたが、これは学習者一人一人を尊重していないという点で問題である。教師は学習者一人一人を尊重し、文化的背景などの特徴を把握することで学習者との信頼関係を築くことが重要である。しかし、教師がすべての学習者に目を配り、そのすべての特徴を把握することは難しい。教師はそのために何ができるかを日々考えていくことが重要だと思われる。